

**臨床医学委員会・健康・生活科学委員会合同
出生・発達分科会（第26期・第13回）
議事要旨**

1. 日 時 令和6年10月30日（水）9:30～10:30

2. 会 場 オンライン会議（zoom）

3. 出席者（五十音順）

高橋尚人、熊谷晋一郎（以上、会員）

石崎優子、島 蘭 進、船曳康子、水口 雅、水野紀子（以上、連携会員）

4. 議事録作成者 高橋 尚人

5. 議事概要

船曳康子連携会員より、「神経発達症と人権」のタイトルで、今まで取り組まれて来た大変広範囲にわたる研究について話題提供をしていただいた。主な内容としては「行動評価スケールの開発」「発達障害者の脳機能研究」「小児の神経発達研究」「発達障害の方への社会的支援」「国際的メンタルヘルス研究」「その他の臨床研究」などであった。

冒頭で政策用語としての「発達障害」の名称の由来や現在の神経発達症の診断基準の解説をしていただいた。次にご自身の大きな研究テーマであった評価スケール「MSPA」の開発と保険収載への道のりの説明があった。また、偏見対策としての障害者の脳機能研究についても解説していただいた。特に視覚刺激や聴覚刺激への反応について従来の理解とは異なる病態・機序があることが説明され、自閉症児は微妙な刺激に対しても非常に脳に負荷がかかっていることや個人差が大きいことが示され印象的であった。また、発達障害による二次的な障害があることも説明があった。

それらの解説の後に、そのような障害者のライフステージに渡る支援の方法と重要性の説明があった。特に病院での医療行為と人生の支援をどのように分担したら良いかについての提案も示唆に富む内容だった。

最後に、現代社会の SNS などの発展に伴う問題についても提起がなされ、発達障害の診断は当事者の人権に関わることで慎重な対応が必要なことについての意見があった。

この分科会のテーマである「小児の人権」に深く関係する内容で、最近の不登校や引きこもりの増加など現代社会に直接関わる内容であり、この分科会での今後の議論に対して、大変重要な意義のある内容であった。

以上